【305】

氏　名（国籍）	劉（りゅう）　勲寧（くんねい）（中　国）
学位の種類	博　士（言語学）
学位記番号	博　乙　第　1948　号
学位授与年月日	平成15年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**現代中国語のテンス・アスペクトマーカー“了”の研究**

主　査	筑波大学教授		林　史典
副　査	筑波大学教授		向嶋成美
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	松本　肇
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	坪井美樹
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	伊原大策

論文の内容の要旨

本論文は，現代中国語の助詞“了”について，通時的及び共時的視点から，その機能と起源を明らかにしたものである。これまで“了”に関する研究は数多く発表されてきたが，その機能や起源についての見解は一致を見ておらず，“了”の発生から現代に至る変遷過程に，統一的な解釈を与えることが求められてきた。

本論文は，この問題に村して，先ず現代中国語の“了”の文法的意味とそれが関わる文法構造を解明し，その後，“了”の淵源について述べる。さらに，語末の“了”と文末の“了”の関連性とその差異を明らかにし，“了”が含む諸問題を包括的に解決しようとする。

本論文の構成と各章の要旨は以下のとおりである。

序　章　写作縁起及過程
第1章　現代漢語詞尾“了”的語法意義
第2章　現代漢語的句子構造与詞尾“了”的語法位置
第3章　現代漢語从句中的“了”
第4章　現代漢語句尾“了”的来源
第5章　≪祖堂集≫“去”和“去也”方言証
第6章　現代漢語句尾“了”的語法意義及其与詞尾“了”的聯系
第7章　現代漢語句尾“了”的語法意義及其解説
第8章　関於語法分析的幾個原則問題

序章は，本論文を完成させるに至った経過を述べ，あわせて論文全体の梗概を示したものである。ここでは，“了”に関する研究史における自らの研究の位置づけが試みられ，同時に，現代中国語の“了”を，語尾の“了”（動詞や形容詞の後に用いられるもの）と文末の“了”（文末に用いられて語気を示すもの）とに分けて分析することの有効性が説明される。

第1章は，“了”の文法的意味に関する著者の見解を示したものである。すなわち「完了」を表すとさ

れる従来の説に対して，著者は豊富な例文を使って丁寧に反駁を加え，「動作の完了」という概念では不十分なことを明らかにする。さらに，“V了”と“V完”の比較を通じて，“了”が「完了」を表すと見なしがたい事実を指摘し，続いて「実現」という概念を提示する。ここにおいて著者は，“了”の文法機能を「動詞あるいは形容詞によって表される内容が事実化する」ことと総括する。

第2章は，語末の“了”が文構造に対して作用する機能についてのユニークな研究である。すなわち，一文に複数の動詞が用いられた場合，“了”が付くべき位置が後ろに移動する事実により，“了”が焦点動詞に用いられるという見解を述べたものである。

中国語においては，句読点は必ずしも実際の文構造を反映するとは言えず，どこで文が終了するかは不明確なままである。しかし著者が本章で明らかにした知見によれば，中国語の文構造の分析に対して新たな視点を提供することが可能となり，従来の曖昧さを排除することができる。

第3章は，第2章で述べられた内容について，日本語との関連からさらに分析を加え，自説を補ったものである。

第4章は，本論文の核心となる重要な部分であり，同時に“了”の研究史にとって特筆すべき内容を含む。

従来の研究を振り返れば，語末の“了”と文末の“了”が同音同形を持つにもかかわらず，文法機能に差異がある点について，諸説が発表されながら解決を見るには至らなかった。

この難問を解決するため，著者は先ず現代の山西・陝西・河北などの方言を調査し，音韻の面から語気助詞に検討を加えた。その結果，“也”と文末の“了”との音韻的結びつきには，以下の如き平行関係の存在することに気づく。

$$也 = \frac{ia}{ie} : \frac{a}{e} \qquad は \qquad 了 = \frac{lia}{lie} : \frac{la}{le}$$ に平行する。

続いて著者は南唐時代の文献『祖堂集』から“了”字を抽出し，“了”字の前後の文脈について分析を行った。その過程において著者は，以下の事実を見出す。すなわち，『祖堂集』に現れる文末の“了也”の用例が現代中国語の文末の“了”に対応する一方，“也”のつかない“了”が現代中国語の語尾の“了”に一致する。

かくして著者は，現代中国語の文末の“了”は，中古中国語における文末の“了也”を起源とし，その合音によって成立したものであるという結論を導き出した。

さらに著者は，1998年に韓国で偶然に発見された元代刊本『老乞大』を用い，この作品中の“了也”文と，明代刊本『老乞大』の該当部分を対照し，元代刊本『老乞大』中の文末“了也”が明代刊本『老乞大』では“了”に大量に書き換えられている事実を見出した。これは，“了也”から“了”に変化する変遷過程が歴史上，実際に存在したことを裏付けるものである。

第5章は，現代方言と歴史的文献に基づき「去也」の合音現象を探り，第4章で主張した文末の“了”の起源に関する説を補強したものである。これによって，文末の語気詞としての“也”が確かに存在し，それが前位置の要素と合音現象を生じることを，通時的及び共時的視点からあらためて論証した。

第6章は，本論文の以上の見解を受けて，文末の“了”と語末の“了”について史的変遷過程を整理し，現代中国語における文末の“了”の文法機能への継承関係を説明したものである。

第7章は，本論文の論証過程で得られた成果をもとに，言語教育の立場から“了”の用法について触れつつ，その文法機能について統一的な解釈を示したものである。

第8章は，本論文のもととなった論考を発表した際に寄せられた疑問や反論に対して，あらためて一章を設けて回答したものである。ここではそれぞれの問題に対して著者の見解が個別に述べられ，本論文の主張を明確にすることが意図されている。

審査の結果の要旨

現代中国語において，助詞“了”は最もありふれた語の一つでありながら，その機能と起源には検討を要すべき問題が数多く存在した。そのため，これまで少なからぬ論考が発表されてきたにもかかわらず，長い間解決を見ることはなかった。それは“了”が多様な文法機能を具えるとともに，長い歴史の中で複雑な変遷過程を経てきたものだからである。

本論文は，先人の研究成果に頼りながらも，その不合理な点を批判的に排除しつつ，独自の観点から“了”の機能と歴史に新しい知見を加えたものである。例えば，本論文の第2章及び第3章において述べられる“了”の使用条件についての見解は，著者によって初めて示されたものではないが，“了”の機能全体に目配りし，焦点動詞の概念を用いて先行研究の不足を補ったものである。この点は，本論文の価値を高めるものとして評価することができる。

また，第4章及び第5章では，“了”の起源について，歴史的文献と現代方言の両面から詳しい分析が加えられており，独創性が発揮されている。そこで展開される論証の手法は精密であり，そこで得られる結論は説得性に富む。とりわけ「現代中国語文末の“了”＝中古中国語文末の“了也”」という見解は，“了”の歴史的変遷に関する謎を解く鍵となるものであり，現代中国語の“了”の文法機能の研究に新しい視点を提供するものでもある。

本論文は歴史的資料と方言資料を同時に扱っており，それがこの研究の質を高めることになっている。しかし，扱うべき範囲が多岐にわたり，それだけに，一部において十分な確認を欠いたまま論を進める点が見受けられる。

例えば，本論文の第1章において，「実現」という概念を用いて“了”の機能を説明しようとする見解は，従来の「完了」説の不足を補うことができるものの，さらに多面的な分析に基づく論証が待たれる。また，第6章第4節で述べられる反復疑問文の中間に現れる「也」を，近代白話語気詞「也」と同一のものとして扱おうとする点にも注意が求められる。この「也」の解釈には異説が存在し，扱いには慎重さが求められよう。しかしながら，これらはわずかな瑕疵にすぎず，これが本論文の導く結論に影響を与えることはない。そのため，これによって本論文の価値が減じるわけではない。

著者の研究は，複数の視点から用意周到に考察を進め，独創的で説得性に富む結論を導き出すという点に特徴があり，本論文に示された研究成果は，“了”の研究史に特筆されるべきものと見なすことができる。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。